

# 自由な美術活動空間

- 開催日時：令和4年3月12日（土） 午後2時から午後3時30分まで
- 活動場所：東京都立永福学園 多目的スペース
- 参加者数：

一般参加者	教員	合計
3人	3人	6人

- シンポジスト：本郷 寛 氏（東京藝術大学参与・名誉教授）  
中津川 浩章 氏（アーティスト・アートディレクター）  
伏見 明（本研究会代表・東京都立永福学園校長）
- コーディネーター：中西 晶大 氏（(株)自然堂ディレクター）
- シンポジウムの概要：

第3回ワークショップを3月12日（土）に延期したため、シンポジウムは同日開催となった。

シンポジストがこれまでに創作した作品を見ながら、意見を交わせたのは、効果的であった。



- シンポジストの主な発言：

- ・アニメのキャラクターを描く参加者が多い。本人たちの大切なものを反映している。これを美術ではないと否定してしまうと主体性や創造性の入口をふさいでしまう。社会では、まんが、アニメは位置付いている。社会と教育の乖離を解消する必要がある。国は子供から美術家まで連続的に捉え、美術教育も文化庁の所管となった。
- ・障害のある人の作品を社会につなげる必要がある。評価の規準が、現在形成されてきている。構成力や色遣いなどではなく、心に迫ってくるといったものが評価される傾向にある。大人は余白があると埋めたくなくなるが、魅力的でないものになってしまう。何か足りないということの肯定で、美術教育も変わる。どのような社会を作っていくのか、作品の魅力をアウトプットしての世論形成が重要である。
- ・一方で、学校教育で、筆の使い方、はさみの使い方、糊の使い方といったベースがあるから、自由な表現もできる。そのバランスが重要である。
- 一般参加者の主な発言：
- ・子供が絵を描くときに口出しをしてしまっていたが、これでいいんだと見られるようになった。そうしたら、絵が子供の楽しみになり、生活の中に入ってきた。
- ・この様な自由な空間を求めている。広い空間で、他の参加者から刺激を得ている。
- ・福祉の場でも、美術活動を取り入れている場所が増えて欲しい。